国文学研究資料館報
第10号
昭和53年3月

日本文学史について

ドナルド・キーン

（会場拍手）私は十三年前から日本文学通史を書きはじめました。その困難さを予想できたら決して書きはじめなかったでしょう。二十年前からコロンビア大学で日本文学史を講じていましたし、その前から日本の過去の文学も現代の文学も読んでいたので書けるだろうと思ったのです。

常識的に古代から『古事記』、『日本書紀』の順に書き進めましたが、平安朝末になって私の知らない、また注釈本のない疑古小説が出てきました。私は苦労して疑古小説を勉強しました。人は苦労するとその苦労を他に伝えたくなるものでしょうか。私は『源氏物語』より、より詳しく疑古小説のあらすじなどを書きました。『源氏』には英訳があって広く知られていますが、疑古小説には英訳はないので、『源氏』とどう違うか、平安朝の文学から何を採ったかなどを詳しく書きました。

この様な経験の中で私は一つの選択を迫られました。学生に話しかける様な会話体の調子に文学史の文体を統一するか、もっと学問的に書くか、つまり『源氏物語』『枕草子』『土佐日記』については疑古小説より詳しくしっかりした記述をするか、いずれかを選ばねばなりませんでした。

私は後者の道を選びましたが、書いてゆくうちにもっとよい文学史を書きたいという欲が出てきました。ためらった末に私は一番自信のある近世文学から書き始めることにしました。私は近松の『国性爺合戦』を博士論文にしました。その後、近松の英訳集、また芭蕉その他近世文学の英訳をやったので、最初に近世をやり、ついで近代、現代、最後に上代、中古、中世を書こうと思いました。

書きはじめるといろいろな問題にぶつかりました。先ず何冊本になるかの問題があります。私は英語で書かれた外国文学の歴史を調べました。中国文学史一冊、イタリヤ文学史一冊、ロシヤ文学史一冊、です。私は私の日本文学史を二冊にしようと思いました。その場合、どこで分けるかということが問題です。以前、私は日本文学選集を二冊出しました。その時は明治以前、明治以降に分けました。しかし、近世を先に出したらどうなりますか。（会場、笑い）あと上代、中古、中世と近代、現代を一冊にすることは出来ません。出版社に頼んで三冊本にすることを承諾してもらいました。（笑い）　その後、近代の執筆に移りましたら、また問題が起りました。近代はジャンル別――小説、詩（和歌、俳句を含む）、戯曲――に書くことにして、深い理由もなく詩から書き始めました。ところが、現代詩たけで二百頁分の原稿が出来上り、続いて短歌七十頁、現代俳句七十頁、現代戯曲百頁、……また本ができました。（笑い）しかたなく四冊本になりました。ことによったら五冊本になって出版社が破産するのではないか、（会場、爆笑）と思われます。

しかし、私は日本文学史を書きます。三十何年も前から現在まで学んだすべての知識を、勿論私の欠点もさらけ出すことになるでしょう。

私の日本文学史は、はじめは学生にむかってしゃべる様な調子で書きましたが、だんだん文体が変ってもっと真面目な深刻な文学史になりつつあります。〈㊟ドナルド・キーン氏は『日本文学史』（近世編、中央公論社）出版の後、同文学史（近代編）を執筆中である。〉

—目　次—

日本文学史について……ドナルド・キーン…1
コンピュータシステムの建設に
あたって……田嶋一夫…10
第一回国際日本文学研究集会報告…6
文献資料部事業報告……大久保正…12
寄贈・移管・寄託書の紹介……
研究情報部事業報告……古川清彦…13
……杉山重行…7
昭和五十三年度春季学会開催一覧…16

私はなぜ日本文学史を英語で書かなければならないかという問題が何よりも最初に浮んできます。これは非常に簡単に説明できます。英文の日本文学史は、私以前には、八十年前に英国の外交官でアストンという大変頭脳のすぐれた人が書いただけです。それは一冊本で明治三十年頃出版されました。アストンの執筆の苦労は大変なものだったと思います。当時は丁寧な注釈本、活字本がありませんでした。彼は木版本を使って勉強したのです。木版本ではひらがな、「さ」でも「す」でもいろいろの字体がありました。また、くずされた漢字を読まなければなりません。彼が残したノートがケムブリッジ大学の図書館に保存されていますが、それを見ると、彼がどんなに時間をかけ苦心して勉強したかよく分ります。

ところが現在は、残念なことに、彼の日本文学史は何の役にも立たない。アストンはこの日本文学史を執筆した時は人々が永遠に読んでくれるだろうと思ったに違いない。私も日本文学史の書き手として同じ心境です。（会場、キーン教授、笑い）

彼の日本文学史は困ります。先ず彼は予言者ではありませんから、明治三十年以後の文学については書いていません。明治三十年以後の文学を無視する訳にはいきません。また、彼は『源平盛衰記』は傑作であるが、『平家物語』はつまらない改作にすぎない、とるにたらない価値のないものである、中世の日本のことをしるには『源平盛衰記』が一番よいと言っています。私は賛成ではありませんが、そこまでは、まあよいとしましょう。アストンは能は劇・芝居でもなければ詩でもない荒唐無稽のものである、何の価値もない読むに足らないものであると書いています。私は能の翻訳経験者としてこの意見には絶対に賛成出来ません。

また、アストンは英国ビクトリヤ王朝の人で、先の吉田先生のお話し（⑭ドナルド・キーン氏の前に吉田精一氏の講演「東西の日記文学」があった）にあった様な日記をつけていなかったので私生活は分りませんが、公の立場はきちんとして礼儀正しかった。彼は西鶴のことを書く場合に、尾籠すぎてその本の名前も挙げられないと言いました。過去の人は女性も読むかも知れないと考えて表現を気にしました。

作家をほめる場合についても私はアストンに同意できません。彼は日本の作家の中で第一の作家は滝沢馬琴であったと言っています。これは日本人の間でも当時は珍らしくない意見です。坪内逍遙も若い時はそう考えたことでしょう。しかし私は馬琴を読んで、それほどの作家とは感じません。楽しんで読むものではありません。

アストンは私の先輩ですが、現在私は学生に彼の日本文学史をすすめることはできません。役に立たない珍らしい文献にすぎません。

そこで私は英語で新らしい日本文学史を書こうとしました。

文学史として何が一番重要か、何よりも「事実」であると私は思います。事実を無視することは出来ません。芭蕉の生年、没年は勿論、西鶴の小説の名前でも、必ず挙げなければなりません。ところが、日本文学の場合はその事実を捕えることがむずかしい。外国文学の場合は他にいろいろむずかしい問題があっても、「発音」については問題ありません。

日本文学の場合は発音についてだけ考えてもどれほど多くの困難があることでしょうか。「菅茶山」は「チャザン」でしょうか、「サザン」でしょうか。私は「チャザン」にしましたが間違っているかもしれません。豊臣秀吉の甥「秀次」は「ヒデツグ」でなく「ヒデツギ」であることが学界で明らかになりました。

芥川龍之介の父親の名前「新原」は「ニイハラ」か「シンバラ」か。私は調査の末に『芥川龍之介の父親』を主題とした本をみつけました。これで分ったと思ったらその本のどこにも「新原」の発音が書いてない。（笑い）。電話帳で調べようとしましたが、東京の電話帳にサ行とナ行がどんなに多いか、（笑い）、ナ行の方が一寸多い位です。（笑い）

たまたま大岡昇平さんの解説の中に丁寧に「シンバラ」と仮名がふってあり、もう一つの関係ある書物の索引のサ行に「新原」がありました。私は「シンバラ」と読んで一編の随筆を書きました。ところが、その後、芥川比呂志さんから電話があり、「ニイハラが正しい」と教えて下さったのです。この様に発音の分らない場合はどうしたらよいのでしょう。

新原さんの場合は分っても、徳川時代のことは調査困難です。特に小説とか浄瑠璃、歌舞伎の題名の発音は分りません。辞典、索引があっても発音が分らなければ引くことが出来ません。例えば「艶容女舞衣」を「ハデスガタオンナマイギヌ」と読

むのはむずかしい。その読み方を知るのがあるいは日本文学鑑賞の楽しみなのかも知れませんが、しかし、日本文学史執筆の楽しみではありません。

「世阿弥」は長い間「セアミ」でした。戦後になって「ゼアミ」になりました。英語で書くと両者は全く違います。「セアミ」と覚えた外国人、戦前学んだ外国人は私の本の索引を調べて、「世阿弥」について何も書いてないと思うでしょう。

もう一つ困ることには作品の作者が分らない場合がある。世阿弥の書いた論文の中に作品名が出てきてその作者が書いてない場合、世阿弥の作品であるかどうか、確実には分りません。また「松風」の場合、観阿弥の作品に手を入れたということになっているが、観阿弥作と言うべきか世阿弥作というべきか不明である。こんな簡単なこともなかなか分らない。また合作の場合は、例えば「仮名手本忠臣蔵」の第三段の著者は竹田出雲か三好松洛か並木千柳か学者の説によって違うのです。

以上述べた「事実」についてすべて正しく書かれても、それだけではつまらない。「私」という作者が存在しなければなりません。事実ばかりだったら電話帳みたいなものになります。電話帳には間違いがないが楽しんで読む人は少いと思います。個人が、事実の背後に立っていなければ誰も読んでくれないと思う。私は思い切って自分の意見を私の本の中におりこもうとしました。場合によっては間違っているかも知れない。私より遙かに詳しい専門家と意見がくい違うかもしれない。しかし、結局は私の本、私が責任を持つ本です。文句のある人は、生きている間はいくらでも聴きますからどしどし意見を言って下さい。事実ばかり羅列された無味乾燥さには私は耐えられない。どうしても私の意見を本の中に入れなければならないと思いました。

その一方では、他の学者の意見と違う場合はその学者の意見も紹介しました。極端な例を挙げますと、私は漱石の晩年の作品は嫌いです。ですからそういう意見をいうと大抵の人は憤激して『道草』と『明暗』は日本文学の最高峯だといって私を責めます。しかし、私は嫌いですからそのことを隠してほめたり、又は毒にも薬にもならない意見を述べたりすれば私の本ではなくなります。そこで先ず私の意見を述べ、また他の学者の意見もつけ加えることにしました。

次に深さと広さのいずれを選択するかという問題があります。芭蕉について八十頁書いて弟子に十頁をあてるか、芭蕉は三十頁ですませてあと多くの弟子に頁を使うかという選択です。西鶴と八文字屋本についても同様の問題がありました。

私は大体において深さの方を選びました。頁数からいうと芭蕉の伝記、蕉風について突込んで書き、弟子のことは芭蕉との関係だけしか書きませんでした。すべての弟子のことを詳しく書こうと思ったら五冊どころか十冊にも二十冊にもなって発表してくれる出版社がありません。（笑い）私はいろんな人の事を書くより中心的な存在、西鶴、芭蕉、近松、蕪村というような人に力を入れ、他の人についても簡単に書くことにしたのです。

次に問題になるのは読者に何を期待出来るかという事でした。英文の本なので欧米の読者が日本についてどういう基礎的知識を持っているかを考えねばなりませんでした。理想的にいえば日本文学史について書く場合もその前提として日本文化史を書かなければならない。文学は文化の一部にすぎない。しかし、私が日本文化史を書こうと思えば私の原稿は倍くらいになります。また、百歳まで生きていても書けるかどうか分らない。私は文化史については、つまり江戸時代の仏教と神道との矛盾をどう処理したか、仏教は果して伝統的な仏教とどんな風に関係しているかなどについては書きませんでした。

私は読者になるべく親切であるようにつとめました。索引も工夫して語彙索引をつけました。日本人の読者は徳川時代のことをしりたいと思えばその種の本を簡単に入手出来ます。欧米の読者はそういう訳に行きませんので彼らの便宜をはかって、歴史的背景について簡単な説明や注をつけました。

「注」について想い出されるのは私がはじめて日本文学について学ぶとき使った友朋堂文庫です。有朋堂文庫ほど不親切なものはありません。知りたくないことの注、「江戸」―今の東京、「孔子様」―支那の哲学者、（笑い）は沢山あっても、近松の道行の注がない。皆よめるからという常識があったのでしょうか。日本古典文学大系の中にも、『源氏物語』―平安朝の小説（笑い）、著者は紫式部（笑い）という注があります。『徒然

草』も同じ様にていねいに説明されています。こんなことは全国民が分っているのではないでしょうか。私の日本文学史の日本語訳が発行されることになった時、私は翻訳者である親友徳岡孝夫氏に相談し、分りにくいところに現代語訳、あるいは丁寧な注を付けることを頼みました。この方が一般の人に対して親切なのではないでしょうか。

私は英文でも日本語訳でも多くの人々に読んでほしいと思いました。しかし、一般の人々というのは一体どういう動物なのでしょうか。誰れも自分のことを一般の人だとは思いません。（笑い）

私はそういう一般の人々、いわば空想上の動物を相手に心配し執筆しているのでしょうか。

私は、日本文学を専門にやっていなくても文学が好きで日本に関心がある読者に期待しています。しかし、その様な読者がどの位あるか分らない。外国では日本と違って出版部数をなかなか教えてくれない。実はそういう読者は一人もいないのかも知れないと、私はハラハラしています。

私はまた日本の読者と外国人の読者との違いにも注意せねばなりませんでした。外国人は翻訳で読みます。日本人は原文を読みます。原文にはそれぞれ違う著者の文体があり、時代によっても文体が変るが、翻訳となると、全部が同じような文体になります。原文を読んだ方がよいに決まっていますが、時々翻訳は原文よりも面白いです。漢詩の翻訳の場合、特にそうです。原文で読むといかにも古くさい生気のない作品が翻訳では実にいきいきしたすばらしい作品となる場合があります。その反対に、すばらしい和歌や俳句が英訳となるとどこがいいのか誰にも分らない場合があります。芭蕉の

道のべの槿は馬にくはれけり

を、英語をご存じの方は翻訳してみて下さい。槿（むくげ）が馬にくわれた、それだけのことです。（笑い）この句の面白さは「けり」にあります。馬は自分の乗っている馬でなければならない。芭蕉の乗っている馬が頭をさげてそこに咲いている槿をたべてしまった。その時の芭蕉の驚きが「けり」で表わされているのです。しかも「けり」の翻訳は不可能です。いろいろ工夫しても「!!」を書いても、同じ様な効果をあげることは出来ません。

その場合、私は思い切って読者にこれは傑作である（笑い）と押しつけました。信じてくれない人は気の毒です。

近代文学の評価の場合でも、翻訳を読む欧米の読者と原文を読む日本人とでは判断が違います。例えば漱石、鷗外、潤一郎をすぐれている順に並べなさいと言われた場合、日本人なら漱石、鷗外、潤一郎、又は、鷗外、漱石、潤一郎の順にあげるでしょう。潤一郎を第一位とする日本人は少ないでしょう。ところが外国人は百パーセントまで潤一郎、漱石、鷗外の順に並べるのではないかと思います。要するに鷗外の文体のよさとか、過去の封建時代についての該博な知識とか、ヨーロッパと始めて接触した明治時代の人間としての魅力とかは外国人には分らないのです。

ですから私は外国人の読者を頭におく場合はどうしても鷗外、また漱石より谷崎潤一郎の事を書かねばならなくなるのです。

私の日本文学についての予備知識についていえば、私は二十何年前から翻訳、論文を書いています。日本文学を楽しく鑑賞したのは三十年前からです。しかし、原稿を書いてみると一度も読んだことのない作家が近代、現代文学の中にあったし、過去の文学の場合にも沢山ありました。その時、私はどうしたらよいか。理想とすれば近松の事を書く場合は、『近松全集』十二巻全部読まなければなりません。ところが『近松全集』は大正十三年に出版されたものですが注がありませんので、初期のものはあまり読んでいません。

もし私が『近松全集』を全部読もうとすると、一体、何時近松のことを書けるかということになります。この一生でなかなか書けないのではないか。私は芭蕉と西鶴の場合は全部読みました。芭蕉の場合は全部読んでも大したことはない。西鶴の場合は幸い『定本西鶴全集』がありますから読めます。ところが西鶴は読めても八文字屋本は読めない。その場合は日本人の推薦したもの、例えば、安藤自笑の一番の傑作だけを読みました。

十分時間があってすべての作品を読めば、今まで日本人が余りとりあげなかった作品の中にも傑作を発見できるかも知れませんが、私にはそれほど時間の余裕がありませんでした。

もう一つ、どこからどこまで書くかという問題がありました。「どこから」は簡単で『古事記』からと決まっています。「どこまで」につい

ては私は戦後の事は書きたくなかった。まだ絶対的価値が決まっていないから。しかし、一応明治百年にあたる一九六八年まで書くことにしました。この年は川端康成がノーベル賞を受賞して、日本現代文学が始めて世界文学の檜舞台に登場した年です。この年までに知られていなかった作家のことを書かないことにしました。

次にどういう風に書くかの問題があります。年代順に年譜風に書くことも考えられるが、これは面白くない、文学をつかまえるには不親切な方法です。私は二つの方法をとりました。その一つは作家毎にまとめる方法、一つはジャンル毎にまとめる方法です。近松、芭蕉、西鶴などの一流作家は作家としてまとめ、芭蕉の弟子、後期の浄瑠璃、後期の俳諧の場合は一種の運動として取扱いました。そういう訳で一茶等のために一章設けることはしませんでした。

作品の筋書きを書くべきかどうかの問題もありました。『源氏物語』の場合は皆知っていますから必要ありません。しかし『妹背山婦女庭訓』を読んでいる読者は極く一部です。それで筋書を書きましたが、筋書を全部書いてしまってから面白くないことが分りました。筋が複雑で人物が多すぎてこれでは楽しんで読む読者はいません。どうしたらよいか。編集者は巻末の附録に入れたらという意見を述べました。私はその意見に従い、小説、歌舞伎、浄瑠璃のあらすじを全部最後にまとめて記しました。

また外国人は日本人の名前を覚えきれないので人物名はなるべく彼、彼女、主人公などを使うようにしたが、日本訳となると人物名があった方が分りやすい。彼、彼女、主人公というより直接人物名を書いた方が読みやすい。その点でも英語の原文と日本語訳が違います。

最終的に決定的な問題は私ひとりどうしてこんな大きな仕事をひきうけたかということです。常識的に考えると日本に各時代の専門家が何人もいますから、分担したらよい文学史が出来ます。英文学史でも一人で通史を書く様な無鉄砲なひとはいない。大体自分の専門を書くのが常識的書き方です。ところが何人かで分担した文学史は統一性を欠いています。筆者によって文章が異なり、また、専門と専門との間に隙間があります。風はよく通るんですが…（笑い）。隙間を埋めてくれる編集者がいなければ永遠に隙間のままです。私が重要な作家を落したとすれば、確かに私の不勉強の做ですが、しかしこれまでの様な風通しのよい文学史の場合と違って私個人が責任を負います。委員会によって作った文学史とは違います。

以上、いろいろ述べましたが、最後に、私が日本文学史を書こうと思ったのは何よりも自分の教育のためであると白状しなければなりません。私は二十何年も前から日本文学史を授業してきましたので、その間、私の勉強したことを全部書きたいと思いました。どういう喜びがあったか、またどういう幻滅があったか、を書きたかったのです。

独りで書いたので、説明不十分もあり、間違いもあるが、私という人間が本の中に出てくるのではないか。と思います。私はどんな本を読んでもその中に作家を感じないと寂しいと感じてきましたから、きっと私の日本文学史には私が現われてくると思います。それがつまらない人間と判断されても仕方ありません。

外国人として長い間、日本文学を読み愛してきた人間の世界に対する一つの遺産として読んで戴ければ何よりと存じます。（会場拍手）

――昭和五十二年十月一日（土）一時三〇分より
当館主催公開講演会・於大会議室・要旨――（14ページ参照）

第一回 国際日本文学研究集会（報告）

海外における日本研究は、以前はきわめてまれであったが、戦後は多数の大学等で組織的に行われるようになり、研究者の数も急速に増加している。『海外日本研究機関及び研究者要覧』福岡ユネスコ協会（一九七六年）によれば、日本研究者数は一三四四名（うち文学関係二五七名）であり、国際交流基金日本研究センターの調べでは、日本に滞在（一九七七年一月現在）している研究者・研究生の数は六一九名（うち文学関係八九名）となっている。

今回、国文学研究資料館において、国際日本文学研究集会が開催されたことについては、開会における市古貞次組織委員長のあいさつの中に、「日本文学に関する国際的な研究集会をもちたいということは、二十余年来、外国から来られた方々から要望されたことでありますし、私ども国内の研究者の間でも、同様な希望を持ち続けておりました。けれども種々の事情で残念ながら容易に実現することができませんでした。幸い本年（一九七七年）七月、国文学研究資料館が開館致しましたので、開館記念の意味も含めて、本日開催することになった次第です。」と述べられている。

この研究集会は、日本学術振興会の援助を得て、昭和五十二年十一月十日に国文学研究資料館の会議室で開催され、同十一日には、宮内庁書陵部の展示見学、裏千家東京出張所の茶の湯、国立劇場における「海援隊」の観劇が行われた。

集会には日本を含めて十六ヵ国八十五名（うち日本三十六名）の参加があった。特別講演、研究発表の内容については『国際日本文学研究集会会議録（第一回）』に記録されている。

日本文学の研究集会であるから、当然のことであるが、発表はもちろん、質疑を含め、すべての会議運営を全部日本語で行い、しかも何んの支障もなかったことは、国際会議としては画期的なことであった。第一日の夕刻、組織委員会主催で開催されたレセプションにおいても、十六ヵ国の人々が、すべて日本語で、打ちとけた懇談を楽しむことができたことも、大へんすばらしいことであった。

今回は第一回の試みなので、全参加者にご意見・ご感想についてアンケートを求めたが、討議の時間が不足するという指摘のほか、多くの参加者から、今後も開催するように希望があった。この研究集会の目的として掲げられた、「研究者の国際交流を深め、広い視野から日本文学研究の進展をはかる」ためにも、ぜひ今後もこれら参加者の期待にこたえられるように努力してゆきたいものである。

（組織委員会事務局　山中光一）

国際日本文学研究集会会議録（第1回）

PROCEEDINGS OF THE 1st INTERNATIONAL CONFERENCE
ON
JAPANESE LITERATURE IN JAPAN
(1977)

目　次

あいさつ　市古　貞次
スナップ集
特別講演
狂言と現代との接点　リチャード・マッキノン
日本におけるモダニズム作家について　ドナルド・キーン
研究発表
古今集への影響と古今集からの影響　ニコラス・ティール
西洋から見た日本の女流日記文学の伝統　キャサリン・ブロデリック
文学研究の中枢概念としての「文学」および「作品」　坂野　信彦
夏目漱石の言語の使用から生ずる翻訳上の諸問題　アラン・ターニー
「新散文詩」について　デニス・キーン
記録編
集会日程、研究集会の経過、参加者名簿、組織委員会名簿

A－5版　86　頁
発行　国際日本文学研究集会組織委員会、国文学研究資料館

寄贈・移管・寄託書の紹介

杉山　重行

現在までに当館に寄贈・移管・寄託された資料のうち、整理を終えたものは次のようである。

(1)富士谷御杖関係資料（岩谷静・栗田清子氏寄贈）三九点

(2)国立教育研究所（移管）二三七点

(3)東京大学附属図書館（移管）二〇五五点

(4)故久松潜一博士旧蔵本（寄託）一〇六点

(5)金子元臣旧蔵本（寄託）五点

(6)初雁文庫（寄託）七四三点

右のうち、(1)～(4)については、先に発行した国文学研究資料館報別冊第一号で「特別コレクション―国学者自筆本等―」「寄託資料―故久松潜一博士蔵書―」等として掲載したのでそれを参照されたい。

(5)は『古今和歌集評釈』『枕草子評釈』など卓越した考証批評で著名な金子元臣の旧蔵本である。金子武雄氏より寄託せられた左記の資料で、鎌倉・室町物語の研究には欠くことのできない貴重な資料といえよう。

(イ)夜の寝覚　江戸初期写　五冊

(ロ)我身にたどる姫君　江戸初期写　四冊

(ハ)恋路ゆかしき大将　江戸初期写　一冊

(ニ)物語書目備考　江戸後期写　一冊

(ホ)万葉評釈　一一冊

(イ)は中村秋香旧蔵本で、本文系統はいわゆる改作本系統である。(ロ)(ハ)はともに同筆蹟にて九条家旧蔵本。(ニ)は伴氏旧蔵本で、伴直方自筆稿本と思われる。(ホ)は『万葉集評釈』（明治書院、昭10～20、四冊未完）巻十以降の草稿である。

(6)は故西下経一博士旧蔵本で、平安時代和歌（古今集、古今集注・伝授、私家集）物語（源氏物語、伊勢物語、住吉物語他）関係の資料が多く注目に価する。紙幅の都合で、影写本・複製・活字本を除いて掲示すると次のようである。

古語拾遺（刊）
仏足石和歌集解（刊）
催馬楽・古本風俗誌（写）
神楽譜（写）
神楽注秘抄・催馬楽注秘抄（写）
古今和歌集（写一六種、刊一八種）
古今集灌頂部秘歌百十六首注（写）
古今和歌集序注（写）
古今秘註抄（写）
顕注密勘（刊）
顕注密勘（刊）
顕註密勘（写）
僻案抄（刊）
古今集為家抄（写）
古今為家抄（写）
古今和歌集序註（刊）
古今序注（写）
古今集抄（写）
古今抄延五記（刊）
古今和歌集両度聞書（刊）
古今和歌集序聞書（写）
古今和歌集抄（刊）
古今和歌集序注（写）
古今集童蒙抄（写）
古今栄雅抄（刊）
古今和歌注（写）
古今血脈抄（写）
伝授抄（写）
古今和歌集序註（写）
教端抄（写）
古今和歌集抄（写）
古今余材抄（写）
古今集序秘抄（写）
古今集序存疑（写）
古今集相伝之記（写）
古今和歌灌頂巻（写）
古今口伝（写）
古今通（写）
古今生弓抄（写）
古今打聴（刊）
古今序注五十連言（写）
古今和歌集遠鏡（刊）
古今集遠鏡補正（刊）
古今集活注（写）
古今和歌集伝之弁（写）
古今和歌集類題（刊）
古今集真名字解（刊）
頭書古今和歌集（刊）
古今和歌集正義（写刊各一種）
古今和歌集朗解（刊）
古今和歌集ひなことば（刊）
古今和歌集大全（写）
古今和歌集（古今秘注書入）（写）
古今和歌集注（写）
家伝書（写）
古今和歌集注（写）
序中秘伝切紙（写）
古今天真独朗之巻（写）
古今和歌集灌頂口伝（写）
古今和歌集伝授切紙（写）
古今切紙（写）
中院古今伝授極秘事抄（写）

古今切紙（写）
和歌之切紙（写）
古今集秘伝（写）
古今和歌集相伝深秘抄（写）
古今口伝秘抄（写）
古今三木三鳥伝授（写）
古今集灌頂口伝（写）
古今和歌集灌頂（写）
三鳥伝（写）
古今箱伝授（写）
三鳥三木切紙伝弁古今次序（写）
古今集内伝授（写）
後水尾院御集（写）
古今集切紙（写）
古今和歌集註（写）
古今集口訣（写）
切紙口伝条々（写）
古今切紙伝（写）
古今切紙廿三ヶ条口伝（写）
切紙（写）
古今十巻之切紙（写）
古今伝秘図（写）
古今秘奥（写）
八雲神詠和歌三神大極秘口訣（写）
和歌秘録（写）
三箇秘授（写）
歌書の大事（写）
歌の秘書（写）
和歌秘録（写）
古今二字相伝（写）

古今和歌集六義考（写）
古今和歌集調海（写）
質疑（写）
古今集百人一首（刊）
和歌灌頂次第秘密抄（写）
権跡古今集歌切（刊）
古今和歌集序注（写）
古今和歌集注（写）
二条家古今集奥儀口伝（写）
古今集之中伝授之事書抜（写）
歌道筒守（写）
古今集撰者三鳥伝源起拝口受明書之分（写）
古今奥秘口決（写）
古今集序・古今六鳥八柏之事（写）
千載和歌集（刊）
仮名遣相伝（写）
後撰和歌集（刊六種）
後撰和歌集標注（刊）
言葉のつかね緒（刊）
拾遺和歌集（刊四種）
後拾遺和歌集（写）
後拾遺和歌集抄（写）
三奏本金葉集（刊）
新古今和歌集（刊四種）
小野小町家集（刊）
三代集（刊）
三代集類題（刊）
歌仙家集（刊）
菅家新撰万葉集（刊）
檜垣家集補註（刊）

源重之女集（写）
赤染衛門歌集（刊）
伊勢大輔集（写）
散木奇歌集（写）
待賢門院堀川集（写）
忠度集（刊）
瓊玉中書王御歌（写）
為家集（写）
金槐和歌集（写二種、刊三種）
新撰和歌集（刊）
古今和歌六帖（刊）
古今和歌六帖標註（刊）
古今和歌六帖拾遺考証（写）
能因玄々集（刊）
月詣和歌集（刊）
月詣和歌集補（刊）
色葉和難集（写）
物名和歌私抄（刊）
堀川百首（写二種）
大井河行幸和歌考証（刊）
日本紀竟宴和歌集（刊二種）
十体無名和歌秘伝集（写）
能因法師歌枕（写）
能因歌枕（刊）
俊頼口伝集（写）
俊頼髄脳（写）
清輔奥義抄（刊）
袖中抄（刊）
詠歌大概抄箋（刊）
無名抄（写）

無名抄（刊）
綺語抄（写）
和歌六部抄（刊）
歌道人物志（刊）
真跡臨本三種歌合（刊）
六百番歌合（刊）
千五百番歌合（刊）
和漢朗詠集（刊）
和漢朗詠集註（刊）
新撰朗詠集（刊）
梁塵愚案抄（刊）
土佐日記（写二種、刊二種）
土佐日記舟の直路（刊）
土佐日記考証（刊二種）
土佐日記抄（刊）
菅家遺戒（刊）
絵入竹取物語（刊）
竹取物語解（刊）
竹取物語抄（刊）
竹取物語俚言解（刊）
竹取物語考（刊）
伊勢物語（写七種、刊五種）
首書伝授入伊勢物語（刊）
新校伊勢物語（刊）
新校絵入伊勢物語（刊）
注入伊勢物語（刊）
真名伊勢物語（刊）
伊勢物語抄（刊）
頭書注釈伊勢物語（刊）
校正伊勢物語抄（刊）

楷書勢語序（刊）
伊勢物語奥書秘訣（写）
伊勢物語秘奥抄（写）
伊勢物語和歌類句（写）
伊勢物語阿古根浦秘伝書（写）
伊勢物語註（写）
伊勢物語（写）
伊勢物語註釈（写）
伊勢物語抄（写）
伊勢物語傍註（刊）
伊勢物語題号考（刊）
伊勢物語闕疑抄（刊）
伊勢物語抒海（刊）
伊勢物語改成（刊）
新版絵入伊勢物語読曲清濁（刊）
大和物語（写一種、刊三種）
冠註大和物語（刊）
大和物語抄（刊）
宇津保物語（刊三種）
宇津保物語新釈（刊）
玉琴（刊）
落窪物語（刊）
落窪物語註釈（刊）
枕草子春曙抄（刊）
清少納言傍注（刊）
紫式部日記絵巻（刊）
源氏物語（刊二種）
源氏六帖（刊）
源氏物語（写三種）
源氏物語玉の小櫛（刊）
源氏物語玉の小櫛補遺（刊）
源氏物語評釈（刊）
源氏物語だみことば（刊）
すみれ草（刊）
源氏男女装束鈔（刊）
十帖源氏（刊）
源氏大和絵鑑（刊）
紫家七論（刊）
源語梯（刊）
紫文清息（刊）
紫文蜑之囀（刊）
源氏鬢鏡（刊）
源氏ひながた（刊）
絵本草源氏（刊）
日本紀御局考（刊）
手まくら（刊）
室町源氏（刊）
源註拾遺（刊）
源語秘訣抄（刊）
源註拾遺（写）
源氏小鏡（刊三種）
源氏十五ヶ諸抄書抜（写）
源氏男女装束抄（写）
少女巻抄注（刊）
源氏男女装束抄（刊）
源氏装束図式文化考（写）
河海抄（写）
源語奥旨（写）
源氏仙源抄（写）
岷江入楚（写）
源氏物語若草（写）
源氏物語切紙（写）
源義弁引抄（刊）
源氏物語（刊）
源氏物語系図（写）
おさな源氏（刊）
狭衣（刊）
狭衣系図（写）
浜松中納言物語（写）
とりかへばや（写）
宇治大納言物語（刊）
忍び音（写）
十訓抄（刊）
住吉物語（写一〇種、刊四種）
方丈記諺解（刊）
鴨長明方丈記抄（刊）
徒然草諸抄大成（刊）
徒然草吟和抄（刊）
徒然草抄（刊）
井蛙抄（刊）
徹書記物語（刊）
往生要集（刊三種）
十種香之記（写）
科註妙法蓮華経（刊）
西行法師一代記（刊）
興禅護国論（刊）
西行撰集抄（刊）
平家物語（刊）
保元物語（刊）
平治物語（刊）
宇治拾遺物語（刊）
古今著聞集抄（刊）
九暦（写）
本朝紹運録続録（写）
明恵上人伝記（刊）
雅語訳解大成（刊）
古語訳解（刊）
詞葉新雅（刊）
史籍年表（刊）
和名類聚抄（刊）
新撰字鏡（写）
雅言抄（写）
雅言訳解（刊）
増補古言梯標注（刊）
雅言童喩（刊）
古言梯要抜（写）
御代始鈔（刊）
日本歳時記（刊）
装束図式（刊）
拾要抄（写）
大内裏全図（刊）
歌かたり（刊）
なしのもと集（写）
群書一覧（刊）
阿波国文庫図書目録（写）

コンピュータシステムの建設にあたって

田嶋　一夫

関係者各位の並々ならぬ御努力により、五十二年度予算で、コンピュータ及び漢字プリンタシステムの導入が認められ、昨年十二月二十八日、無事搬入設置が済み、日立製作所より引渡しを受け（漢字システムについては一月三十一日）、もっか室員、日立製作所、FHL株式会社担当者一同、一致協力してシステム建設にとりくんでいます。

コンピュータの導入については、「国文学研究資料館の創設経過」（当館館報、第一号）にも記されておりますように、創設の準備段階から考えられており、館が創設されると同時に、その準備をすすめておりましたが、建物の建築の遅れなど、悪条件が重なり、思うにまかせぬ状況が続いておりました。幸い当館が希望していたシステムにほぼ近いものが導入されましたので、御尽力くださいました各位に対し、当初よりその準備をすすめてまいりました者の一人として、厚く御礼申し上げます。

システム建設をはじめるにあたり、システムの概要について記しておきたいと思います。

システムの概要・特色

コンピュータはM一六〇IIシステムで、主たる機器構成は表1のごとくです。中央処理装置は中型機の最上位機種に位置しています。漢字プリンタはH八一九五システムで、コンピュータにはチャンネルで直結されています。漢字プリンタの多くは、通信回線で結ぶか、オフライン機として切り離して使う形がほとんどです。この形で使用するのは、当館のシステムが日本で最初の形です。漢字プリンタをラインプリンタ並みに使い、漢字処理のネックを少しでも軽減するというのが、私達の夢の一つですが、その実現に少しでも近づけたいと思っています。勿論このシステムのデメリットとしては、本体の処理速度に比し、漢字プリンタの処理速度が遅いという問題があり、あたかもおとなが子供の手をひいて歩いているようなものですが、子供が迷子になる心配がないようなものですので、メリットも大きいと考えています。漢字コードは、このほど制定されましたJISコード（JIS C 6226図形文字用符号表として、一月十九日官報公示）に準拠することにいたしました。漢字処理のネックの一つに漢字コードの問題があります。メーカーごとに別々のコード体系を持っていますので、データ交換、利用にはコード変換をしなければ使えないという問題があり、大きなネックになっています。すでに多くのコード体系が存在し、動いている状況の中で、これが一気に解決するとは思いませんが、強いインパクトになることたけはまちがいないことたと思いますので、積極的にとりいれることに致しました。またこのシステムで取扱かえる文字種は表2のとおりですが、私達も何度か漢字頻度調査を実施し、取扱いの基準、原則を漢字選定委員会（委員長・西尾光一山梨大学教授）に御審議いただき、JIS表と照合し、より有効な文字システムにすべく努力いたしました（JIS表では漢字六三四九字が制定されているので、当館独自のものとして六五一字を選定する。）次には端末を充実させるよう努力いたしました。閲覧室に漢字ビデオ、同上用プリンタ（漢字出力）、ビデオデータターミナル、同上用プリンタ（英数カナ出力）、磁気カードリーダ、各一台をつけ、閲覧者のサービスに活用する予定です。この他パンチ室に漢字ビデオ一台をつけました。また研究室にビデオデータターミナル二台をつけ、TSS処理に利用します。この他磁気ディスク八〇〇MBをつけ、オンライン処理に備えディスクベースにしたことなどが、当館システムの特色です。

利用計画

四十七年より利用計画の検討とテスト開発を続けてきました。当初、主として情報検索に使用することが考えられました。その対象として、文献資料（原本）、研究情報（論文）、語彙の三つを対象として、さらに定本作成の分野に利用することが考えられました。この方針は情報検索委員会にはかり指導を受けました。四十八年には、この計画の再検討を行い、図書整理、閲覧管理部門にも、もっと利用すべきであるとの考えから、前記のものに図書情報システムを加えました。以後この方針のもとに準備をすすめてきました。またデータ量、漢字データのもつ性格から

して、コンピュータは中型機が必要との判断が示され、この線で機種の検討も始めました。この間、情報検索テスト(47年)、語彙索引作成テスト(48年)、図書目録作成テスト(49年)、キーワード自動抽出システム(50年)、文献資料目録作成テスト(50年)、情報検索システムの開発研究、漢字頻度調査などを続けてきました。これらの経験、成果をもとに、五十一年度には、マイクロ資料目録の作成システム、逐次刊行物目録の作成システムを整理閲覧室と共同開発してきました。この二つのシステムは、現在新しいハードウェア及びソフトウェアにあわせるべくシステム変換の作業をすすめています。

当館館報八号に寄せられた小島吉雄氏の声(「国文学研究資料館の開館を祝して」)をはじめとして、内外からのコンピュータに対する期待が高まっている現在、その責任の重大さを痛感しています。今後は計画中のシステム開発を一日も早く完成し、その成果を研究者の皆様に御利用いただくとともに、国文学者自身がコンピュータを利用できるような形をつくるべく努力していきたいと思います。あわただしく緊張の連続の中で過ぎていく毎日ですが、時おり、〝新しい学問分野の中にコンピュータを導入するには、その学問分野の中の人間が、使いこなすようにならなければ、生かすことにならない〟と激励し、指導してくださった方々のことばを思いおこしています。このことなくしては、国文学の世界にコンピュータを導入した意義もなくなることになるでしょう。国文学研究者のより一層の御支援と、関係者の御協力を心よりお願い申し上げます。

表1　システム構成（HITAC M160II＋H-8195 漢字プリンタサブシステム）

※主要機器に限った

装置名	型名	台数	摘要
中央処理装置	H-8060-04	1	主記憶768KB
コンソール・ディスプレイ	H-8092-1	1	
〃　・プリンタ	H-F8092-10	1	
磁気テープ装置	H-8467-1	2	200KB/S
ディスク駆動装置	H-8589-11	2	400MB×2
カード読取機	H-8297-10	1	1000枚/分
テープ読取機	H-8223-1	1	500字/秒
漢字入力装置	H-1811-10	1	盤面内 3,072文字
カタカナ印刷鍵盤カードセン孔機	H-1564-K	1	
ラインプリンタ	H-8276-12	1	1,500行/分、文字種110(英・数・カナ)
漢字プリンタ制御装置	H-8191-1	1	
漢字プリンタ	H-8195-1	1	
漢字ディスプレイ	H-9915-21X	2	文字フォント18×16ドット
漢字キーボード	H-9915-51	1	盤面内3,072文字
カナキーボード	H-9915-41	1	
漢字VDT用プリンタ	H-9915-31	1	50行/分
ビデオ・データターミナル	H-9415-11M	3	14型、表示文字種128種
キーボード	H-9721-11C	3	
プリンタ	H-9385-11	1	
磁気カードリーダ	H-9812-11M	1	記録容量　最大72文字

表3　H-8195 漢字プリンタの性能

印字方式	レーザービーム電子写真式
印字速度	12枚/分　A4サイズ
印字サイズ	4°、5°（英・数・カナ）
	6°、8°、10°、12°、16°
漢字種	7,000字　明朝体
	1,117種　ゴチック体
	その他 平かな、片かな、英数字、記号等
用紙	A4、B4、B5　普通紙

表2　文字表

字種	数	小計
特殊文字（記号）	108	
数字	10	
ローマ文字（大・小）	52	
ひらがな（大・小）	83	
かたかな（大・小）	86	
ギリシャ文字（大・小）	48	
ロシア文字（大・小）	66	
機能キャラクタ記号	83	
書式印刷文字	37	573
漢字(JIS第1水準)明朝体	2,965	
〃（〃　第2水準）〃	3,384	
〃（JIS外　）〃	651	7,000
〃　ゴチック体	1,117	1,117
合計		8,690

文献資料部事業報告

大久保　正

前号に引続き昭和五十二年七月一日以降、五十三年一月末日までに当部で行なってきた事業の概要を報告する。

五十二年七月二十五日から当館の閲覧・利用の業務が開始され、閲覧・利用に供すべきマイクロフィルム資料の整備充実のため、当部の調査収集事業の必要性はいよいよ高まり、当部としても責任の重大性を痛感しているが、当館設置の目的に基づく国家予算の性格と、所蔵文庫等の意向とは必ずしも調和し難い場合があるのが実情であり、必ずしもわれわれの希望するように進渉しているとばかりは言い難い。しかし、予算の許す限り、今後いっそう努力して行く所存である。それと共に関係各方面に対しても、当館の事業に対し、いっそうの御理解と御支援をお願いしてやまない。

九州地区国文学文献資料調査員会議の開催

七月十一日、佐賀市城内有明荘において開催、当部から伊井が出席した。議題は佐賀県立図書館鍋島文庫の調査実施に関する具体的計画を中心とし、本年度の九州地区調査につき種々打合せを行なった。なお、この計画に基づき、九州地区調査員の協力により鍋島文庫の調査に成果を挙げることができたが、引続き五十三年度も続行の予定である。

中国・四国地区文献資料調査員会議の開催

七月十四日、広島市東白島町白島会館会議室において開催、当部から大久保・伊井が出席した。昭和五十二年度の中国・四国地区における文献資料調査収集の実施計画について協議し、また各調査員から当地区における文献資料の所在情況等について報告を受けた。なお引続き実施される愛媛県今治市河野記念館所蔵文献資料の調査計画についての説明を行ない、会議の翌日、伊井は調査員数名と共に今治市に向った。同記念館の調査及び撮影は今後も続行の予定である。

東北地区調査打合せの実施

九月二十八日、青森県八戸市立図書館において、同館所蔵本の調査のため、関係調査員に集合を願い、調査・収集についての具体的な打合せを行ない、調査員数名は引続き調査を実施した。なお当館からは伊井が出席した。

昭和五十二年度文献資料調査収集の概況

一、調査

本年度当部が文献資料調査員の協力を得て調査を行なった図書館・文庫等は左の如くである。

北海道・東北地区　函館市立図書館・八戸市立図書館・宮城県図書館

関東地区　東京芸術大学附属図書館・学習院大学図書館・白百合女子大学図書館・赤羽小学校大関文庫・山岸文庫・四孝文庫

中部地区　金沢市立図書館稼堂文庫・加賀市立図書館聖藩文庫・赤木文庫・静岡県立中央図書館・豊橋市民文化会館・富士文庫・西尾市立図書館岩瀬文庫・蓬左文庫・鶴舞中央図書館

関西地区　陽明文庫・京都大学附属図書館・逸翁美術館・枚方市史編纂室・中村幸彦氏

中国・四国地区　岡山市立図書館・広島文教女子大学図書館・河野記念館・愛媛大学附属図書館・高知県立図書館・某家

九州地区　佐賀県立図書館鍋島文庫・島原公民館松平文庫・鹿児島大学附属図書館玉里文庫

二、収集

昭和五十二年度の事業として、四月一日以降、五十三年一月末日までに、調査員の協力を得て当部で収集した（進行中のものを含む）マイクロフィルム資料の概況は左の如くである。

1 徳島県立図書館
「続日本後記」ほか四七二点
2 刈谷市立図書館
「類聚国史考異」ほか八二四点
3 高山市郷土館
「大神宮諸雑記」ほか四一二点
4 桑名市立美術館
「八代集」ほか二四点
5 舞鶴市立西図書館
「頼光勲功記」ほか二七六点
6 宮内庁書陵部
「類標」一点
7 河野記念文化館
「伊勢物語」ほか三四五点
8 陽明文庫
「伊勢平書」ほか二四六点
9 東洋文庫

「吾妻鏡」ほか六一点
10 群馬大学附属図書館
「古語拾遺伝鈔」ほか二一二点
12 青山学院大学図書館
「源氏物語」ほか九二点
13 白百合女子大学図書館
「伊勢物語」ほか写本二四点
14 国学院高等学校図書館藤田小林文庫
「催馬楽筆譜目録」ほか二八二点
15 同　弦之舎文庫
「光源氏之小鏡」ほか五五点
16 荏川文庫（佐渡郡真野町）
「桂林漫録」ほか七二点
17 大願寺（同町）
「古連歌」ほか二点
18 黒川勝敏氏
「源氏物語」一点
19 益田勝実氏
「古事談」ほか一四点
20 大久保　正
「一葉抄」一点
21 本間美術館
「伊勢物語」一点
22 沖森直三郎氏
「更級紀行」一点
23 庵逧　巌氏
「比丘尼縁起」ほか二点
24 東京教育大学附属図書館
「伊勢物語」ほか九六点
25 神宮文庫
「国文世々の跡」ほか三二一点
26 初雁文庫
「枕草子」ほか二点
27 山岸文庫
「連歌」ほか一一六点

ほかに東京大学附属図書館竹冷文庫の既成市販マイクロフィルム一七九点、国会図書館所蔵和古書人名典型ファイルカードのマイクロフィルム収集等がある。

研究情報部事業報告

古川　清彦

七月二十五日（月）の閲覧事務開始によって共同利用機関としての業務機能が各室で発揮されている。電子計算機の導入も実現し、そのシステムの開発が注目されている。国際日本文学研究集会（別項）の意義も重要視されてきた。

(一)情報室。現在までに全国図書館資料（大学図書館は除く）、国文学関係研究者資料のファイル化を完了し、また国文学関係学会・研究会のファイルも完備した。現在、昭和四十九年以降続けてきた新聞情報の整備を急いでいるが、近々参考業務等に利用できる状態にする。その他、情報室では館報の作成、国文学情報（特に学会関係）の収集、当館未所蔵の雑誌調査等を恒常的に行っている。この成果は館報に継続掲載している。

(二)整理閲覧室。(1)受入。十月一日から受入システムが変更になり、文献資料部・研究情報部における図書資料（マイクロ資料・図書・逐次刊行物・視聴覚資料・それらの複製物）に関する供用官は整理閲覧室長になった。このシステム変更のため若干の滞貨が生じたが、受入事務を集中したことによって、今後は円滑な流れが予想される。四月一日から一月十三日までの図書の受入冊数は三、〇七九、一月十三日現在の逐次刊行物のタイトル数は一、四一三である。ほかに、十一月に初雁文庫本七三五点が寄託資料として受入れられ、十二月に国学者自筆稿本三六点が寄贈された。(2)整理。十月六日までに三手文庫、岩国徴古館等一八の所蔵者のマイクロ資料三、九二六点の目録を作成し電算機に入力した。これは昭和五十三年度の累積版『マイクロ資料目録』に包含される予定である。今年度中にあと約五、〇〇〇点の目録を作成し、来年度の入力に備える計画である。図書の記述目録は、担当者を古書と新刊書に分け、受入手続き終了後すぐに作成できるような日常業務体制を確立した。標目決定のトゥールとして国立国会図書館の和古書の人名典拠ファイルを購入した。目録の編成は主としてアルバイトの手で行った。(3)閲覧。七月二十五日に閲覧室を開いてから一月十九日までの登録者数は七五一人、入室者数は九七二人であった。利用方法としては、マイクロ資料と逐次刊行物の複写が多く、四八六件に達した。また図書館間相互利用体制による複写申込も増加の一途をたどっている。六月十五日から、情報処理室とともに機械化された閲覧管理システムの設計を始めた。基本的に閉架資料の管理であること、業者への委託や閲覧の予約等を含んでいるシステムであること等々、柔軟性と拡張のある独特のシステムとなるはずである。

(4)PR。「利用案内」「和漢書簡略目録」等の刊行・配布や見学者の案内等、これは館内各部館の職員の協力

を得て、利用者に対する広報活動を積極的に行っている。

㈢**編集室**。十二月二五日に『国文学研究文献目録』（昭和五〇年）を刊行した。これは一月から至文堂で一部市販もしている。同目録は昨年刊行の四九年目録に較べ三六頁の増で出版文化の隆盛をもの語っている。ひき続き当室では五一年五二年の『文献目録』も編集中であり、二月六日（月）に文献目録委員会を開き、その編集方針を議した。また「国文学研究資料館紀要」四号は三月末刊行の予定である。

㈣**参考室**。電話・郵便による質問への回答、また参考用開架図書の充実につとめている。十月一日（土）一時三〇分より大会議室において左記の公開講演会を催した。

「東西の日記文学」大妻女子大学文学部長　吉田精一　教授

「日本文学史について」当館外国人研究員　ドナルド・キーン　教授

十一月一〇日（木）、一一日（金）に「第一回国際日本文学研究集会」が開催された際に、展示室において特別展示「国学者自筆稿本と奈良絵本を中心にして」を催した。なお展示委員会の事務を担当し、展示室において特別展を年二回（会期はそれぞれ一週間）、それ以外の期間は常設展を行う方針を決め、十二月六日（火）以降「展示・日本文学史」を開催している。

三月四日（土）午后二時から大会議室で「国文学と久松潜一博士」という主題で公開講演会を左記のごとく催した。

「昭和期の万葉集研究」当館文献資料部長　大久保　正　教授

「久松博士のこと」東京教育大学名誉教授　山岸徳平　氏

久松博士講演（録音テープ）

なお当日は特別展示「久松博士のコレクションを中心として」も展示室で行った。

㈤**情報処理室**。当館に導入することになった電子計算機、ハイタックM一六〇Ⅱシステムは、昭和五二年十二月二八日無事搬入・引渡しを完了し、五三年一月四日から使用を開始した。現在、『マイクロ資料目録』編集、『研究文献目録』累積版編集、および閲覧管理システムのプログラム開発を実施中である。またこのシステムに接続する漢字システム（ハイタック八九一五漢字プリンタほか）も、文字種、明朝体七〇〇〇、ゴチック一一一七を用意し、二月一日から使用を開始した。データについては、整理閲覧室で整理した『マイクロ資料目録』追加データ三九二六点および累積用の『研究文献目録』昭和四九年分の入力を行った。また科学研究費特定研究の「学術情報」および「言語」に参加し、情報処理を高度化する研究も実施している。なお九月一日付で小野尚志助手の着任をみた。

＊**マイクロ室**。本年度の主なる事業報告事項としては(1)五一年度に収集したマイクロ写真フィルム（一〇八〇リール約六四〇〇点）を処理して、第二ネガフィルムと閲覧用ポジフィルムを作製した。(2)資料の閲覧・利用の便を企って、五十年度収集資料の中から約一〇〇〇〇点の紙焼写真本を作製した。(3)当館所蔵の原本の利用、主に複写依頼に応じるため、館内マイクロ室で約五〇点の原本撮影を行なった。また国学院高等学校初雁文庫・山岸文庫の各所蔵本一七三点を資料収集のための撮影として行なった。(4)マイクロ室運営委員会において、㈠第二ネガフィルム作製要項。㈡ポジフィルム作製要項。㈢閲覧用紙焼写真本作製要項を検討の上、作成した。また㈣マイクロフィルム撮影要項の一部を改訂した。

主な来館者

CALDWELL,Katherine（米国ミルズ・カレッジ東洋美術教授）

KRAFT,Evas（西ドイツ国立ベルリン図書館東亜部長代理）

桜美林大学中国文学科（30名）

慶応大学図書館情報学科（9名）

図書館短期大学別科（20名）

ドクメンテーション協会（23名）

田辺広（千葉大学附属図書館事務部長）

KURODA,Andrew Y.（米国議会図書館東京事務所長）

SEWELL,Robert G.（イリノイ大学図書館管理教授）

共同研究

当館では、共同利用機関という設置の目的や性格にかんがみ、先年来共同研究のあり方につき検討するかたわら、その予算を要求中であったが、五十二年度に「国文学文献資料の解題研究」ということで若干の予算がつき、別記の共同研究員を委嘱した。そして、文献資料部が立案に当り当館の教官も何人か加わって、取りあえず次の二つのテーマに取組むこととした。

A　国文学における文献資料の解題研究、特に当館における共同研究としてのそれは、いかにあるべきかを、具体的に検討する。

B　その実践例の意味を持たせて、初雁文庫本の解題研究を行う。

共同研究の予算は、当館に一箇月集まって研究する建前になっているので、一応その旨を体しつつ、七月以下十二月まで数回に分けて計三〇日分に相当する討議と作業を行い、ある程度の成果を得た。

次年度には新しいテーマも予定しているが、五十二年度に実践例に用いた初雁文庫本の性格上、検討し残した一般的問題点も多い上、初雁文庫本の解題も必要と思われるものの半分を達成したに過ぎないので、右ABの二テーマは、次年度も続行する予定である。

なお、初雁文庫本はその後その大部分が当館に委託された。また、右のBテーマによる共同研究の成果は、次年度に一応まとめた上では、できるだけ早く刊行して一般の利用に供するのがよいと考えている。

（実務担当者　福田秀一）

国文学研究資料館評議員会議（国文学部会）の開催

標記会議が去る二月一四日（火）開催され、山岸部会長をはじめ六名の評議員の出席を得た。

議事は、当館からの、本年度事業報告及び来年度予算内示などの報告があり、これに対し意見交換がおこなわれ、特に資料の調査・収集・共同研究等について有益な助言をいただいた。

人事異動

（昭和五二年八月～同五三年一月）

（採用）

昭和五二年九月一日付

文部教官（研究情報部助手）

小野　尚志

（昭和五十二年度共同研究員委嘱）

昭和五十二年八月一日付

井上　宗雄（立教大学文学部教授）

片桐　洋一（大阪女子大学学芸学部教授）

滝沢　貞夫（信州大学助教授教育学部）

小町谷照彦（東京学芸大学助教授教育学部）

加藤　定彦（立教大学一般教育部専任講師）

川村　晃生（慶応義塾大学非常勤講師）

鈴木　淳（国学院大学日本文化研究所助手）

荻原　千鶴（お茶の水女子大学助手文教育学部）

国文学研究資料館紀要第四号

浜松中納言物語の方法
―唐后から吉野の姫君へ……伊井春樹

勧進聖と社寺縁起
―室町期を中心として……徳田和夫

一休俗伝考(一)
―江戸時代の一休説話……岡　雅彦

仮名草子における典拠の問題
―『悔草』を中心に……渡辺守邦

松花和歌集巻四（紹介と翻刻）
……福田秀一

国文学研究資料館所蔵『しづか』（翻刻）…村上　学

文献データベース、その作成及び保守における問題点…石塚英弘

（昭和五十三年三月発行）

国文学研究資料館報別冊一号

国文学研究資料館蔵和漢書簡略目録

（一九七七年一一月現在）をこの館報の別冊第1号として刊行した。（昭和52年12月24日）　当館が昭和五二年一一月までに収集し、整理した和漢書二、二三五点の簡略目録で全体を「貴重書」「特別コレクション」「寄託資料」「上代文学（研究・注釈を含む。以下同じ）「中古文学」「中世文学」「近世文学」「近代文学」「国語学」「その他」などに分け、それぞれ書名の五十音順に排列してある。

昭和五十三年度春季学会開催一覧

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会提出はアイウエオ順、以下①事務局（東京都は省略）②大会開催日③会場、の順。

解釈学会①豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内②八月二一～二二日　③国文学研究資料館

近代語学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内②七月一日③昭和女子大学

国語学会①千代田区神田錦町三―二武蔵野書院内②五月二七～二八日③東京女子大学

古事記学会①千葉県市川市国府台二―八―三東京医科歯科大学歴史学研究室内②六月一七～一八日③東京医科歯科大学教養部（市川市）

古代文学会①世田谷区千歳台六―八―八三浦佑之方②予定なし

上代文学会①杉並区永福一―九―一明治大学和泉校舎大久間研究室内②五月二〇～二二日③高岡市農協会館（二〇日）、高岡市文化会館（二一日）〈以上富山県〉

説話文学会①埼玉県上尾市戸崎八一女子聖学院短期大学内②六月二五日③女子聖学院短期大学

全国大学国語国文学会①文京区目白台二―八―一日本女子大学文学部国文学科研究室内②六月三～四日③日本女子大学

中古文学会①京都市上京区今出川通烏丸東入新北小路町同志社大学文学部国文学研究室内②五月二七日～二九日③実践女子大学

中世文学会①港区三田二―一五―四五慶応大学文学部国文学研究室内②五月二〇～二二日③慶応大学西校舎（三田）

日本演劇学会①新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②六月一六～一七日③浜松市内（未確定）

日本歌謡学会①渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部臼田研究室内②五月二七日～二八日③青山学院大学

日本近世文学会①豊島区西池袋三―三四立教大学日本文学研究室内②六月一〇～一一日③戸板女子短期大学

日本近代文学会①千代田区紀尾井町七上智大学文学部国文学研究室内②六月③上智大学

日本口承文芸学会①渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部臼田研究室内②六月四日③筑波大学

日本文学協会①豊島区南大塚二―一七―一〇日本文学協会②予定なし

日本文学風土学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学国文学研究室内②五月二七日③昭和女子大学

日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学文学部国文学研究室内②六月一〇～一一日③東北大学文学部

俳文学会①豊島区目白一―五―一学習院大学文学部国文学科研究室内②予定なし

表現学会①愛知県愛知郡長久手町長湫字片平愛知淑徳大学国文学研究室内②五月二〇～二一日③島根大学

仏教文学研究会①保谷市新町一―一武蔵野女子大学国文学研究室内②六月二四～二五日③高野山大学

万葉学会①大阪府吹田市千里山東三関西大学文学部国文学研究室内②予定なし

美夫君志会①名古屋市昭和区八重本町一〇一―二中京大学国文学科研究室内②七月二二～二五日③中京大学

和歌文学会①新宿区戸山町四二早稲田大学文学部藤平・上野研究室内②予定なし

国文学研究文献目録（昭和50年）
昭和五十二年十二月二十五日刊
編者　国文学研究資料館
発行所　至文堂
この目録は至文堂で市販しております。

※館報（一〇号以降分）入手ご希望の方は、郵便番号、あて先、氏名、を明記の上、郵送料として一号につき、百円切手一枚を同封して、当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第十号
昭和五十三年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―六―三
郵便番号一四二
電話（七八五）七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興